



コリアンテナ

KOREANTENNA



이모

お世話に
なってます。



李京兒著

はじめに

20代を振り返ってみると、「日本」という国はいつも心の中に優しさと暖かさがあったように思います。そんな時代があったから、私は今日本で生活しているかもしれません。自国の慣れから離れ、不慣れな異国で生活する選択をすることは簡単なことではありませんでしたが、もうすでに10年以上の歳月を日本で過ごしているということは、日本がそれだけ魅力的な国であることに違いありません。

私はもともと文を書く人ではありませんし、本を出そうと決めて書いたものでもないのに、多少不足している部分もあるかと思います。日本で生活しながら起きた様々な出来事をまとめた日記を本にしてみました。ごく個人的な内容も含まれておりますので、私と意見が異なる人もいます。

時に、日本人の方から「なぜ韓国はそうなのか？」と質問する方がいらっしゃいます。時に、韓国人の方からは「なぜ日本はそうなのか？」と尋ねる方もいらっしゃいます。理由は簡単です。「韓国は韓国だからそれで日本は日本だから」です。「なぜ？」という質問に対して、私たちは誰もが正しい答えを答えることは不可能だと思います。

私は日本が好きで、日本に住んでいる韓国人で、韓国を代表する者ではありません。愛する私の友達が日本人で、愛する私の家族が韓国人です。愛する私の受講生が日本人で、愛する私の幼なじみが韓国人です。私たちが仲良くしてはいけない理由はどこにもありません。

このエッセイは日本を愛する外国人として日本の生活で感じた点を共有すると同時に、韓国が好きで韓国語を熱心に勉強する学習者たちにとっても少しでも役に立つ書籍であってほしいです。

大切な友達のような私の受講生たちに、翻訳の支援をくださったことに対して深く感謝を申し上げます。

この文を読む方々の心の中に、暖かい日本と韓国が共存することを願います。

韓国語講師 李 京兒 (イ・キョンア)



もくじ

- 수민 씨, 안녕 ~ p.5
スミンさん、さようなら~
- 일본예찬 p.14
日本礼賛
- 마츠리 p.21
祭り
- 부침개 p.28
チヂミ
- 수영수업 p.35
水泳授業
- 한국은 성형대국? p.46
韓国は整形大国?
- 일본 병원 p.52
日本病院
- 야구 구경 p.57
野球観戦
- 꿈꾸는 어른들 p.66
夢見る大人たち
- 지구 상의 또 하나의 생물, 아준마 p.71
地球上のもう一つの生物、おばさん
- 우리들의 먹거리 p.78
私たちの食

한국은 노벨상이 왜 안 나오나요? p.81
韓国はなぜノーベル賞を取れないんですか？

사랑하면 사랑한다고 말을 하라! p.86
愛してるなら、愛してると言ってよ！

인연 p.91
縁

그녀의 이혼 p.96
彼女の離婚

서글픈 귀국 p.102
悲しい帰国

소박한 사치 p.107
ささやかな贅沢

혼자만의 졸업식 p.112
一人きりの卒業式

괜찮아요? p.120
大丈夫ですか？

오미야개 p.125
お土産

호칭 p.129
呼び方

아름다운 동행 p.134
美しい同行

Oh my god!!! p.139
オーマイガー！！！！

翻訳を支援してくださった受講生の皆様の感想 p.146

수민 씨, 안녕~

スミンさん、さようなら~

극 이경아
번역 사튼 규코

文 李 京兒
翻譯 佐藤 京子

“선생님…… 의사 말로는 9 개월이래요…….”

함박눈 같은 눈물을 머금고 나에게 밀도 끝도 없는 말들을 쏟아내기 시작했다.

“네? 무슨??”

그녀는 나의 사랑하는 학생 중의 한 명이다.

나이는 30 대 후반 정도 되었을까?

아님 40 대 초반?

이렇게 말하면 난 그녀에 대해 아는 게 없는 것처럼 보이지만
따스한 눈빛, 참새 같이 귀여운 말투만 들어도 그녀의 기쁨, 슬픔을 읽어낼 만큼 난
그녀와는 제법 가까운 사이이다.

그녀는 오래 전 큰 병을 앓았던 사실과 그로 인한 많은 신체적, 정신적인 상처, 세상을
등지고 싶었던 아픔, 엄마와의 소원한 관계 등을 꼬깃꼬깃 접어놓은 할머니의
쌈짓돈마냥 풀어놓곤 했다.

수업이란 명목 하에 그녀와 울고 웃고 했던 우리들의 지나간 깃털 같은 시간들…….
그렇게 2 년….

新谷 (신야) 상…

그녀는 新谷(신야)라고 하는 어엿한 일본 이름이 있는데도 불구하고
한국 이름 수민이라고 불려지기를 원했고 한국을, 한국사람을 좋아하는 수줍은 미소를
지닌 아가씨이다.

영어에도 능통하고 독일어, 스페인어 등의 언어에도 관심이 많은 엘리트이기도 하고
이따금 작은 라이브 카페에서 스트레스를 털어내기도 하는 젊고 평범한 사람이기도
하다.

그런 그녀가 시한부 선고를 받았다.

난 선생님이란 위치를 망각한 채 그녀의 손을 부여잡고 주책없이 마구 눈물을 쏟아내고 있었다.

“무슨……방…법이 있을……거예요……. 9……개월이…라뇨?
세상엔…… 돌, 돌팔이 의사…가 얼마나 많은데요… 다른 병원에 가봐요. 우리 같이
가봐요……”

암이 7년 만에 재발한 것이다.

얼마 전, 혼자 사는 방 안을 가득 채울 만한 피아노를 너무 갖고 싶어서 장만했다며 반짝반짝 순진한 미소를 지으면서 말했던 그녀.

하지만 얼마 안 있어 왼쪽 손이 저리다고 하더니, 또 어떤 날은 계단에서 넘어졌다며 목발을 짚고 나타났다. 그때부터 무자비한 암세포들이 그녀의 몸 여기저기를 차지하고 뻘뻘한 고개를 쳐들고 있었는지 모른다.

그땐 그녀가 단지, 일 때문에 피곤한 것이라고 나 또한 돌팔이 같은 진단으로 그녀에게 휴식을 권하는 말밖엔 하지 못했다.

그로부터 그녀는 학원을 그만두고 몇 개월 암과의 치열한 싸움에 돌입했다.
아니, 치열하게 싸울 수 있었다면 억울하진 않았겠지?

결국 의사는 아무런 방법이 없다고 했고 머리 슛을 반 이상 앓아간 방사선치료조차 아무 효과가 없다는 말만 되풀이했다.

그녀는 모든 치료를 포기하고 주인 잃은 피아노가 덩그러니 놓인 그녀만의 공간으로 돌아갔다. 일본, 일본, 시간을 죽여가며 그녀 또한 외로움과 싸워갔었겠지…

그녀와 난 또 마주앉았다

“선생님, 저……한국어를 계속 배우고 싶어요”

그녀는 반쪽이 된 작은 몸으로 의자에 기대어 앉아, 들리지도 않는 마르고 거친 목소리로 안간힘을 쓰며 나에게 가느다란 눈길을 보냈다.

난 이성적으로는 거절을 해야만 했다. 나오지도 않는 그 목소리로 어떻게 책을 읽고 대화를 할 수 있겠느냐고, 그 몸으로 어떻게 한 두 시간을 앉아 있을 수 있겠느냐고…….

그리고 난,
난
어떻게
당신을 떠나 보내야 하느냐고……

하지만,
하지만,
난
도저히,
정말 도저히,
그 말을 할 수가 없었다.

그 이후로 난 그녀의 집을 방문해서 그녀에게 한국어를 가르쳤고
그녀와 내가 가졌던 그 시간은 그녀는 더 이상 병자가 아니었고 예전의 즐겁고
익살스런 수민 씨로 돌아갈 수 있었다.

그녀는 내가 돌아갈 때마다 서 있기도 힘든 몸을 가까스로 가누면서도 항상
엘리베이터 앞까지 배웅해 줬고, 그런 그녀가 난 너무 마음이 아파서 그녀의 어깨,
그녀가 가진 미운 암세포까지 꼬옥, 꼬옥 끌어 안아주었다.

이젠
그녀는 내 곁에 없다.

9 개월이란 세월은 정말 야속하게도 지나가더라.

더 이상, 시간을 공유할 수 없는, 저기 저 평화로운, 고통이 없는 세상으로
보리알이 영글고 수국이 흐드러지는 6 월에
먼길을 떠났다.

너무 아프다.

그녀는 이제 고통 없이 편안해졌을 텐데.

나는 왜 이리 아픈 걸까?

오늘은 저 퍽퍽한 비를 머금은 하늘나라에서 조잘조잘 한국말이 들리는 듯하다.

신야 상...

아니 수민 씨,

안녕.....



「先生・・・お医者さんが言うには9ヶ月だそうです・・・」

ぽたん雪のような大粒の涙を浮かべて、やぶから棒に言葉を吐き出し始めた。

「えっ？ 何のこと？」

彼女は私の愛する生徒の一人だ。
年は30才後半ぐらいだろうか？
それとも40代前半？

こう言うと、私は彼女について何も知らないように見えるが、暖かい眼差し、すずめのような可愛い口調を聞くだけでも、彼女の喜び、悲しみを読み取れるくらい、私は彼女とはかなり近い間柄だ。

彼女はずっと前に、大病を患った事があり、それによる多くの身体的、精神的な傷、世の中に背を向けたかった苦しみ、母との疎遠な関係など、胸の内にしまっておいたことを明かしたりもした。

授業という名目のもと、彼女と泣いたり笑ったりしてあっという間に消え去った時間・・・

そのようにして2年・・・

新谷（しんや）さん・・・

彼女は新谷というれっきとした日本名があるのにもかかわらずスミンという韓国名で呼ばれることを望み、韓国が、韓国人が好きなはにかんだ微笑みを浮かべる女性だ。英語にも堪能でドイツ語、スペイン語などの言語にも関心が高いエリートでもあり、時には、小さなライブカフェでストレスを吹き飛ばしたりもする若くて、平凡な人でもある。

そんな彼女が余命宣告を受けた。

私は先生という立場を忘れたまま彼女の手を握りしめて、見境もなくしきりに涙をこぼした。

「何か・・・手立てがあるはずよ・・・9・・・ヶ月・・・だなんて、世の中には・・・いい加減な医者がどんなに多いことか・・・ほかの病院に行ってみましょう。一緒に行ってみましょう・・・」

癌が7年ぶりに再発したのだ。

少し前に、1人暮らしの部屋全体をほぼ占めてしまうピアノがすごくほしくて買ったとキラキラと無邪気な笑顔を浮かべながら語った彼女。

しかし、間もなく左手がしびれると言ったかと思うと、ある日は階段で転んだと言って松葉杖をついて現れた。

その時から、無慈悲な癌細胞が彼女の体のあちこちを占め、さらに彼女を苦しめていたのかもしれない。その時は、彼女がただ仕事で疲れているのだとか、自分こそやぶ医者のようないい加減な診断で、彼女に休息を勧めることしか言えなかった。その後、彼女は韓国語教室を辞めて、数か月の間、癌との熾烈な戦いに突入した。

いや、激しく戦えたなら悔しくなっただろう。

結局、医者はいかなる手立てもないと言い、髪の毛を半分以上奪い取った放射線治療さえ、なんの効果もないという言葉だけ繰り返した。彼女はすべての治療をあきらめて、持ち主を失ったピアノがぼつんと置かれた彼女だけの空間に戻って行った。一分、一分、時間を削りながら、彼女もまた寂しさと戦って行ったのだろう・・・

彼女と私は再び会った。

「先生、私・・・ 韓国語を続けて習いたいです。」

彼女は半分になった小さな体で椅子にもたれ掛かり、微かに聞こえる乾いてかすれた声で、やっとのことで私にか弱い眼差しを投げかけた。

私は理性的には断らなければならなかった。

出もしないその声でどうやって本を読み、会話ができるのかと、その体でどうやって授業時間の間、座っていられるのかと・・・

そして 私は、
私は
どうやって
あなたを見送るべきかと…。

だけど、
だけど、
私は
とても、
どうしても、
そんなことは言えなかった。

その後、私は彼女の家を訪問して韓国語を教えた。
彼女と私が共有したその時間は、彼女はもう病人でなく、以前の楽しくてお茶目なスミン
さんに戻ることが出来た。

彼女は私が訪ねるたびに立っていることさえ辛い体をやっとのことで支え、いつもエレベ
ーターの前まで見送ってくれ、私はそんな彼女がとても不憫で、彼女の肩、彼女を苦しめ
ている憎らしい癌細胞さえもぎゅっと、ぎゅっと抱きしめた。

今はもう彼女は私の傍らにはいない。

9ヶ月という歳月は本当に無情にも過ぎていった。
これ以上、時間を共有出来ない、平和な、苦痛のないあの世界へ、
麦が実り、紫陽花が咲き乱れる6月に旅経った。

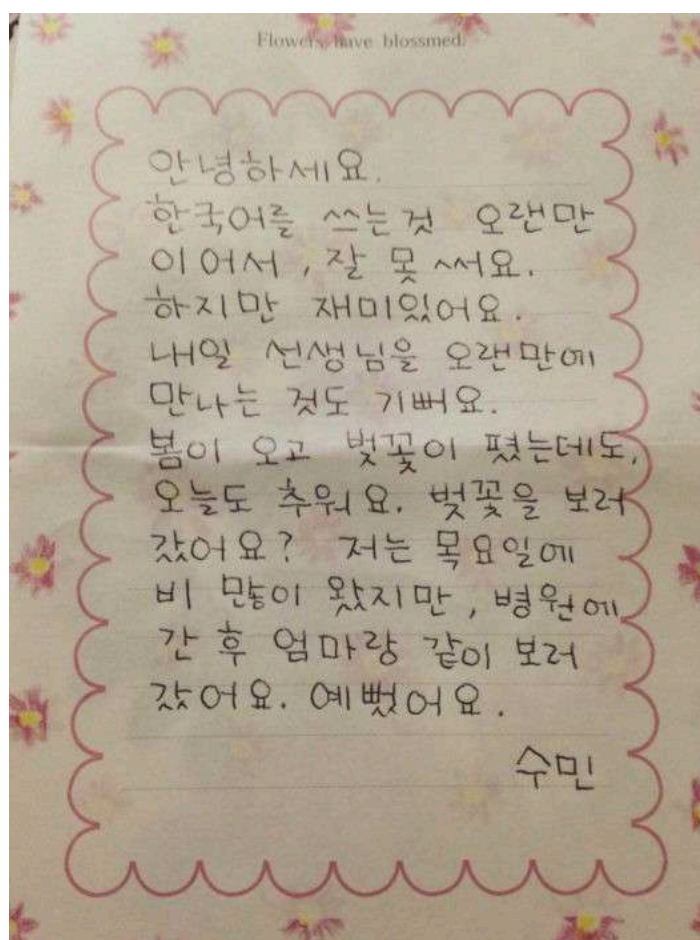
悲しみに胸が張り裂けそうだ。
彼女はもう苦しまずに楽になったはずなのに。
私はどうしてこんなに辛いのだろうか。

今日はあの雨が降り出しそうな黒い雲を宿した天国から、彼女の愛らしい韓国語が聞こえて来るようだ。

新谷さん・・・

いや、スミンさん・・・

さようなら・・・



▲実際に新谷（スミン）さんがキョンア先生に残した手紙

試し読みありがとうございます。

続きはご購入後にお読みいただけます。